

## 島根県内の老健施設における認知症の 周辺症状と介護負担の実態調査

なか やま ひろ のり おお にし ひさ お  
中 山 博 識<sup>1)</sup> 大 西 久 男<sup>2)</sup>  
にし かわ たかし  
西 川 隆<sup>2)</sup>

キーワード：認知症，周辺症状，BPSD，介護負担度

### 要 旨

認知症の行動異常や精神症状などいわゆる「周辺症状」は、利用者本人を苦しめるだけでなく介護者の介護負担を増大させ、QOL（生活の質）を大きく損なう原因となり得る。

今回、当施設利用者の周辺症状と介護負担の実態を調査し、その発生頻度と種類、原疾患、認知症の重症度、認知機能、介護負担度を調査した。その結果、入所者の84%が認知症を有し、周辺症状は多い順に、無為・無関心、うつ・不快、不安、睡眠障害、興奮、易怒性、異常行動、妄想、幻覚、脱抑制、食行動異常、多幸を認めた。認知症の重症度と周辺症状の程度・負担は相関しており、介護の負担を有意に増大させる要因として、妄想、不安、無為・無関心、易怒性、異常行動、睡眠障害、食行動異常の7項目が関与していた。またそのうち、「不安」、「無為・無関心」の2項目は全般的なADLの介護負担にも有意な影響を与えていた。

### はじめに

わが国では、現在認知症高齢者が約150万人強と見込まれているが、今後急速に増加し2015年には250万人になると推計されている。認知症の症状は、大きく記憶障害や実行機能の障害といった中核症状と、認知症の行動・心理症状である周辺症状に分けられ、「周辺症状」は、利用者本人を

苦しめるだけでなく介護者の介護負担を増大させる。特徴としては、軽症から中等症に進行するに従い頻繁に出現するようになり、急速にQOLの低下を招き、介護老人保健施設に勤務する職員にとっても介護負担を増大させる大きな問題である。

全国老人保健施設協会が調査した結果をみると、老健施設に入所しておられる利用者の86%が認知症であり、認知機能はHDS-Rで平均13.5点とかなり進んだ人が多い。認知症ケアに関しては、心理的な援助や易怒性や興奮などの周辺症状のケア、訴えを長々と聞くとといったことに、70%の職員が

Hironori NAKAYAMA et al.

1) 社会福祉法人多伎の郷老人保健施設たき

2) 大阪府立大学総合リハビリテーション学部

連絡先：〒699-0903 出雲市多伎町小田50-7